

審査の結果の要旨

氏名 花嶋 裕久

従来10代・20代の若者の問題として捉えられがちであった「引きこもり」は、近年長期化・高年齢化の傾向が顕著に認められ、支援の方法についても模索の段階にある。引きこもり当事者の「居場所」を作りそこを足場に社会につなげていこうとする試みもその1つである。本論文は、居場所支援に長年関わってきた著者が、引きこもりの長期化のプロセスを明らかにした上で改善のための働きかけの試みおよびその効果を検討しようとしたものである。

本研究は全5部10章から構成されている。第1部「研究の展望」では、引きこもりがどのような問題として現れておりどういう形で研究がなされてきたかを概観し(1章)、研究の目的とそれに適した研究方法が提示された(2章)。第2部「息子の生き方を受け入れてゆくプロセス—親の視点」では、4組の夫婦に対するインタビューを基礎にして、親からみた引きこもりの生起とその経過(3章)、および、それに対する親の対処の可能性と引きこもりに対する納得の仕方(4章)を、多様な要因の関係に言及しながら夫婦間の見解の齟齬も含めて詳細に記述している。第3部「就労を果たしていくプロセス—当事者の視点」では、引きこもり経験者で就労に成功した12名にインタビューを行い、「居場所」を経て社会につながるまで(5章)、就労して居場所を離れるまで(6章)を、当事者の体験過程のモデルとして示した。そこには幾重にもわたる循環的な経路とその経路間での往還が含まれており、これが引きこもりの長期化に関係する背景の1つと考えられた。第4部「当事者に対する居場所支援の効果の検証」では、現在広がりつつある支援の試みが1年という期間でどういう効果を挙げうるのかを、数量的な指標を用いて確認しようとして試みている。まず居場所支援を受けた当事者の自己評定を基礎に、引きこもりで問題とされることが多いソーシャルスキル、対人恐怖心性、基本的信頼感の変化を調査し、約60名の結果から主にソーシャルスキルの向上が認められることを示した(7章)。その一方で、支援機関スタッフによる他者評定も行なって同じ利用者の社会生活技能の変化の程度を査定し、特に基本的生活習慣の改善と会話スキルの向上が認められたことを報告した(8章)。第5部では、研究の意義と限界、今後の課題がまとめられ、引きこもり支援のあり方への提言がなされた。

本論文は、アクセスのしにくい対象者に対して詳細な聞き取りを行い、その体験とその多様な背景条件を整理した上で事例研究的に生き生きと提示しえた点が高く評価できる。また、支援活動の効果を複数視点から検証してその共通点を取り出して、これまでの引きこもり支援を評価し、今後の発展につなげた点も、意義が大きいと考えられる。対象の性格上、幅広い範囲のサンプルを得ることが難しく、知見の一般化可能性という点では限界があるものの、引きこもり支援に対する実証研究の先鞭をつけたという点で、博士(教育学)の学位を授与するにふさわしいものと判断された。